

## 中国の円明園における築山・水面と建築群の位置関係からみた庭園空間の特徴

The Spatial Feature of Old Summer Palace from the Perspective of Position Relationship between Hill-Water and Architecture

張 亜平\* 馬 嘉\* 戚 光珉\*\* 章 俊華\*

Yaping ZHANG Jia MA Kwangmin HAM Junhua ZHANG

**Abstract:** This study focuses on the spatial features of Old Summer Palace in China from the perspective of position relationship between hill-water and architecture. The 40 gardens in Old Summer Palace were divided into 4 groups according to the relationship with the surrounding, sight orientation and the location of hill and water. In Group A, these gardens have several space types and were surrounded by hills and waters which make the garden space separated from surrounding. These gardens in Group B form closed garden space by architectural which were closed to environment rather than the construction of hill and water. These gardens in Group C have opening garden space and multi-directional sight by few hills surrounded and opening architectural composition. The gardens of Group D were surrounded by a little hills and sight orientation which make them look opening appropriately. Overall, not only the composition of architecture, but also the construction of hill and water in Old Summer Palace were affected by the traditional geomancy culture, and the innovative techniques were also applied in this garden especially in the residence area.

**Keywords:** Old Summer Palace, hill, water, architecture, boundary, garden spatial feature

**キーワード:** 円明園, 築山, 水面, 建築, 境界線, 庭園空間の特徴

### 1. はじめに

中国の古典的な庭園は、一般的に山・水・植栽・建築の4つ要素で構成されている<sup>1)</sup>。庭園の立地と築造方式によって、中国の古典的な庭園は自然的な山水庭園と人工的な山水庭園に分けられている。人工的な山水庭園には、築山・水面・植栽・建築はすべて自然なものを模倣し人間によって作られ、造園技法が最大限に発揮されているため、古典的な庭園芸術の最も代表的な種類とみなされている<sup>2)</sup>。清の全盛期に北京の北西に造営された皇室庭園の円明園は、まさに歴史上の有名で人工的な山水庭園である。

円明園は康熙48年(1709年)に建設が始まり、全国の造園良匠を集め、水も草も豊富である沼沢地で、湖を掘り山を築き、楼殿閣亭を建て、木や花を植えて、乾隆9年(1744年)に約200haにも及ぶ広大な離宮ができあがり、「万園の園」と称賛された<sup>3)</sup>。ところが、1860年のアロー戦争の時、円明園は北京を攻撃したイギリス・フランス軍により略奪、放火され、徹底的に破壊され、廃墟となった。円明園に対する研究は、名園の昔の風姿を十分に感じ取り、中国の古典的な庭園の粋を深く理解するのに役に立ち、将来の再建に参考とすることもできる。

現在では、円明園の山水に関する研究は、地形を修復するための築山の材質・池護岸の構造・水源などの調査がある<sup>4,5,6)</sup>。風水の観点からみる全園の水面の配置についての既往研究より<sup>7,8,9,10)</sup>、数十の小型の庭園を大きい水面(後湖と福海)の周囲に並べる配置は伝統的な風水理論と神仙思想の影響を受けたことを明らかにした。しかしながら、中国伝統的な造園芸術の最盛期(清朝)に築かれた円明園の最も著しい特徴は、様々な建築を中心とした小型の「園中園」より構成されることである<sup>11)</sup>。同時代に玉泉山静明園・頤和園・承德避暑山莊など「園中園」も築かれたが、すべて既存の地形を利用している自然的な山水庭園であり、円明園のような人工的な山水庭園は唯一無二とみなされている。このことより、「園中園」における庭園の空間造営上で、円明園を深く掘り下げて検討する価値がある。現在まで、この方面の既往研究

<sup>4,12,13,14)</sup>は単に築山あるいは水面のみに注目しており、建築は庭園において最も重要な構造物であるが、その属性が見落とされていると考えられる。既往研究として、張らは円明園の「園中園」に着目することで、建築配置の観点から庭園の中心である空間の特徴を解明した<sup>23)</sup>。本研究では、その研究の範囲を広げ、建築群と建築に近接されている築山・水面の組み合わせを把握し、庭園空間をできるだけ総合的に明らかにし、庭園空間造営の手法を検討することを目的とする。

### 2. 研究対象と方法

#### (1) 研究対象

円明園は何度か増築され、乾隆9年(1744年)に原形ができあがった。その年に、乾隆皇帝は宮廷絵師に絹本彩絵で円明園の全貌を描くよう命令していた、即ち現代まで伝わってきた40枚分景図の『円明園四十景図』である。円明園は廃墟となっているが、『円明園四十景図』に当時のほとんどの景色が描かれており、円明園の最盛期の風貌を詳しく記録している<sup>15)</sup>。そのため、本研究はその作品に現れた40か所の庭園を研究対象とする。

#### (2) 研究方法

まず、円明園に関する論文・文献・図面などを調べ、円明園の山水景観の築造過程や形態・役割などを探り、各庭園の位置・機能などの基本情報を把握する。『円明園四十景図』<sup>16)</sup>を主要な資料として、関連資料<sup>15,17)</sup>を参考にし、円明園最盛期の40か所の庭園の平面図(図-1)を作成する<sup>18)</sup>。その次、各庭園内における建築群と周囲の関係・庭園内の主な視線の向き・築山の方位・水面の方位を分析要素として整理し、考察する。40か所の庭園空間の特徴を把握するために、以上の結果に基づき、クラスター分析によって分類し<sup>19)</sup>、築山・水面と建築群の位置関係の主な類型を得ることで、庭園空間の特徴を明らかにする。最後に、既往研究の結果と時代背景と文化背景を結びつけ、各類型の特徴を総合的に考察することで、空間造営の手法を検討する。

\*千葉大学大学院園芸学研究所 \*\*清華大学建築学院

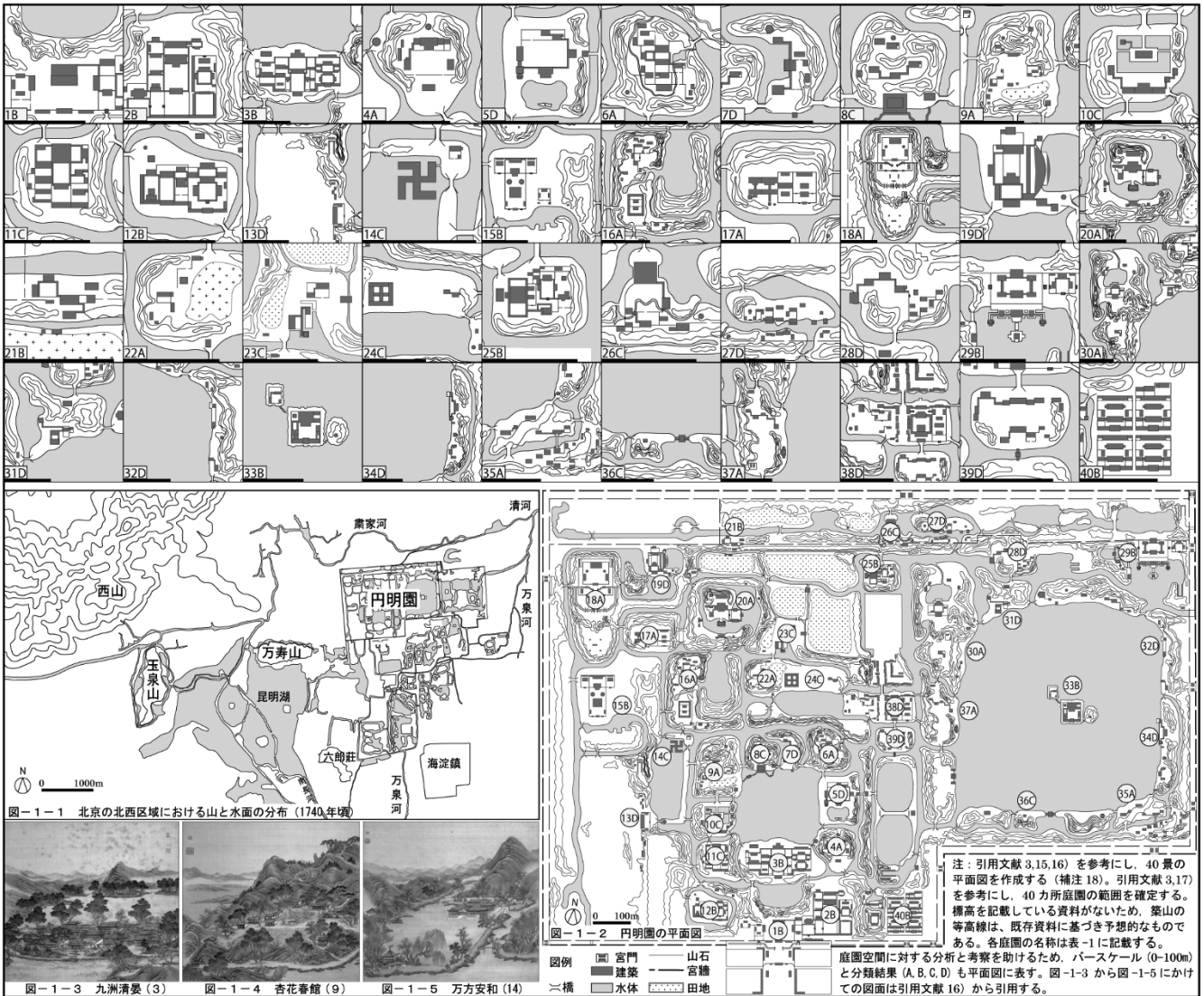


図-1 円明園40景の位置と平面図

### 3. 円明園における築山・水面の概要

北京城の北西には西山が平野を囲み、その余脈が玉泉山及び万寿山である(図-1-1)。玉泉山と万寿山の南東部は平地と低地であって、水利の便が極めて良く、人工的な庭園を築造するための自然的条件が備わっていた<sup>11,20)</sup>。円明園の初建(1709年)は水道発掘から始まり、園内で密集した川道と湖を形成し、掘った土を近くで積み上げ、築山となった<sup>11)</sup>。

円明園の中の築山は一般的に最も外側の塀を美化するために塀に沿って配置される。または、各庭園の周囲に積み上げ、建築群を囲んでいる。1933年に作成した圓明園の遺跡の測量図<sup>18)</sup>によると、築山の形態は主に狭くて帯状であって、幅は5m~15mのものが多い<sup>4)</sup>。西山・玉泉山・万寿山が園内の借景となっており、さらに当時の土木工事の制約を受けたため、園内の築山は高くない<sup>4)</sup>。遺跡の測量図により、築山の高さは一般的に7m以下であり<sup>6)</sup>、最低のものは1.98mである<sup>21)</sup>。このことにより、築山の高さが意図的に人の視線以上に設定され、築山は空間を囲うものとなった<sup>7)</sup>。しかし、長い間に自然的な風化と人為的破壊行為<sup>22)</sup>のため、1933年の測量図では、『円明園四十景図』の時代(1744年)にあたる築山の高さは確定できない。本研究の主な研究内容は、園中園において庭園の範囲の確定、庭園内部空間と周辺環境を分ける手法などであり、借景のような工学的な空間の分析にかかわらないため、本研究では高さの差異を考えずに築山が平面上の庭園空間を囲う物体とみなす。

円明園には、人工的な水面が全園に広がっている。最大規模の水面は東側にある福海(585m×513m)であり、次は南西側にある後湖(232m×198m)である<sup>4,21)</sup>。多くの小規模の水面は庭園の間に通り抜け、庭園の境界線となっているとは限らず、縦横に交錯している水上交通のネットワークも構成されている。また、『円明園四十景図』によると、園内では滝・泉などの小型の景観とする水景も見られるが、庭園空間を作り上げる上では空間性を左右する要素とは認定できないため、本研究の範囲に含まない。

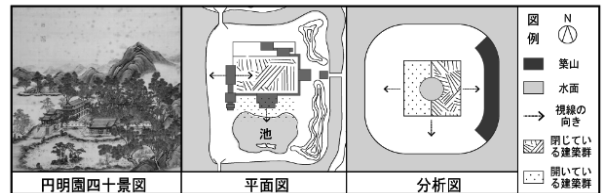


図-2 天然图画(No.5)を例とする庭園空間の分析

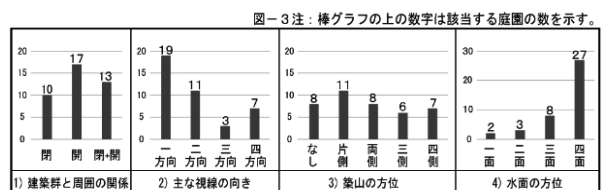


図-3 各庭園における築山・水面と建築群の配置

表-1 築山・水面と建築群の位置関係の分類

分類	園名	築山の方位	水面の方位	主要な視線の向き	園内の特徴		
A	9 遊 杏花亭	O	E, S, W	E, S, W, N			
	37 遊 蓮華浴池	O	E, S, W	E, S, W, N			
	22 遊 秋水園	O	E, S, W	E, S, W, N			
	4 遊 鏡月井	C	O, S	E, W, N			
	17 茶 白雲亭	C	O, S	E, W, N			
	16 生 雲霞亭	C	O, S	E, W, N			
	18 茶 清遠亭	C	O, S	E, W, N			
	20 生 蓮華池	O	S	E, S, W, N			
	16 生 翠微園	C	O, S	E, S, W, N			
	30 生 龍虎亭	C	O, S	E, S, W, N			
	33 遊 別香亭	O	S	E, S, W, N			
合計					6 10 3 11 0 2 0 9 11 0 0 1 1 1 6		
B	12 生 長春仙館	C	S	E, S, W, N			
	34 生 蓮華池	C	S	E, S, W, N			
	3 生 九淵清池	C	S	E, S, W, N			
	13 茶 月地云雨	C	S	E, S, W, N			
	25 生 西峰秀色	C	S	E, S, W, N			
	B 1 政 正大光明	C	S	N			
	40 生 洞天深處	C	S	N			
	2 生 龍虎園	C	S	N			
	25 茶 方壺樓	C	S	N			
	21 茶 多稼如雲	C	S	N			
	合計					10 2 0 10 0 1 5 2 2 2 5 7 6 10	
C	8 遊 上下天元	O	E, S, W, N	E, S, W, N			
	10 遊 瑞雲亭	O	E, S, W, N	E, S, W, N			
	11 生 瑞雲亭	O	E, S, W, N	E, S, W, N			
	14 生 方方安和	O	E, S, W, N	E, S, W, N			
	24 生 游泊亭	O	E, S, W, N	E, S, N			
	26 生 魚躍高飛	C	O, E, S, W, N	S			
	36 遊 探微亭	O	E, S, W, N	S			
	23 遊 水木亭	O	E, S, W, N	S			
	合計					2 7 8 8 8 7 3 2 4 1 8 8 6 8 3	
	D	31 遊 平遠秋山	C	O, S, W		E, S, W, N	
		5 遊 坐石臨流	C	O, E, S, W		N	
5 遊 天然園		C	O, E, S, W	E			
13 生 養芳院		C	O, E, S, W	E			
13 遊 山嵐火火		C	O, E, S, W	E			
7 遊 歸雲書院		O	S, W	E, N			
27 遊 西堂書院		O	S, W	E, S, W, N			
27 遊 北道山軒		O	S	W			
39 遊 幽院風亭		O	S	E, S, W, N			
32 遊 蓮華池		O	W	E			
34 遊 接雲亭		O	W	E			
合計					5 11 4 8 8 0 7 1 1 4 0 10 11 9 1		
設計					23 30 1 15 3 16 10 2 5 1 4 18 33 35 34 38 1		

4. 築山・水面と建築群の位置関係からみた庭園空間の特徴

(1) 築山・水面と建築群の位置関係の分類要素

前章の調査より、円明園において「園中園」は、建築群を中心として、周囲に築山と水面を配置し、庭園空間を造営するという構造がわかる。この特徴により、本研究は建築群と築山・水面を具体的な研究対象とする。既往研究<sup>29)</sup>から建築群と周囲環境の基本的な関係を示す「建築群と周囲の関係」という分析要素に着目し、庭園内の主な視線の向き・築山の方位・水面の方位の分析要素をふまえ、4つの観点から庭園空間の特徴を分析する(図-2)。

1) 建築群と周囲の関係

庭園内に、主な活動空間を作り上げる建築群と周囲の関係は「開いている」と「閉じている」の2種類に分けられる<sup>29)</sup>。40か所の庭園においては、周辺に対して開いているのは17か所で、閉じているのは10か所である。また、残りの13か所では両方の特性をあわせもっている(図-3)。全体的にみると、円明園には周辺に対して開いている建築群の配置が多く(表-1)、遊覧鑑賞と居住の機能をもっている離宮御苑の位置付け<sup>3)</sup>と合致する。

2) 庭園内の主な視線の向き

庭園内の主な視線の向きは一般的に主な建築の向きにより決定される<sup>24)</sup>。円明園においては、建築群は通常主要な建築と付属建築により構成されているため、本研究は主要な建築の向きを視線の向きとする<sup>25)</sup>。40か所の庭園は、半数(21か所)の庭園の主な視線が両方向(11か所)、3つの方向(3か所)あるいは全方向(7か所)に設定されている。他の庭園(19か所)の多くは南向きの視線のみである(図-3)。全体的にみると、40か所の庭園においては、南向きの視線(37か所)が他の向きより遥かに多い(表-1)。このことから、円明園内の建築配置は主に「坐北朝南(北に背を向け南に面している)」という伝統的な建築配置に従う一方で、複数の方向をあわせもつ特徴もみられる。

3) 築山の方位

前章の築山の調査により、築山は多く庭園のへりに分布され、庭園内部空間と外部空間を切り離していることがわかる。40か所の庭園において片側で山を築く庭園(11か所)が最も多く、次は両側の築山(8か所)と築山なし(8か所)である。また、三方が築山に囲まれている庭園(6か所)と四方に囲まれている庭園(7か所)も見られる(図-3)。全体的にみると、40か所の庭園においては、東側(25か所)に山を築くものが最も多く、次は西

側(18か所)と北側(15か所)であり、南側は14か所と比較的に少ない(表-1)。庭園内に主な視線の多くは南向きであるため、南側に比較的に少なく山を築く原因は、できる限り南向きの視線を阻まないようにするためであると考えられる。

4) 水面の方位

前章の水面の調査により、水面は多く庭園の周囲に分布され、庭園の境界線となっていることがわかる。40か所において、四方を水で囲まれている庭園は最も多く(27か所)、三方(8か所)に囲まれているものもある。また、両側(3か所)と片側(2か所)に水面に面している庭園も見られる(図-3)。このことから、水面は庭園の範囲を規定するための重要なものであると考えられる。全体的にみると、40か所において、各方向で水面に面している頻度は著しい差が見られない。また、10か所の庭園には水面の配置をあわせもつことで、庭園内に水景観が形成されている(表-1)。

(2) 庭園空間の特徴

上記の結果に基づき、クラスター分析(Ward法と平方ユークリッド距離)を利用し、40か所の庭園は4類型に分けられる(表-1)。

グループA(11か所)では、ほとんど(10か所)の庭園には周辺に対して開いている建築配置がみられ開放的な空間を構成するが、6か所は閉じている建築配置をあわせもち、一部で閉鎖的な空間も形成され、庭園は両方の特徴を有している。11か所すべてにおいて南向きの主な視線がみられ、そのうち少数の庭園で東向き(3か所)と北向き(2か所)の視線をあわせもっている。半数以上の庭園(7か所)は、各方向でも築山がみられ、他の4か所は3つの方向で築山に囲まれている。広く分布した築山は庭園内部空間と外部空間の間の障壁となり、庭園空間が周辺環境と分離されている。庭園の周囲を水面で囲むことで、明確な境界線が形成され、独立的な庭園を強調できる。また、6か所の庭園の中には水面の配置をあわせもち、水景観を形成し、築山が周囲の水景観を遮る短所を補っている。グループAの庭園は主に生活娯楽空間と遊覧鑑賞空間として築造され(表-1)、建築は主に周囲に対して閉じている合院型と開いている自由型、線型、散点型の配置である<sup>29)</sup>。本研究でわかるのは、グループAの庭園において、築山と水面を2層の境界線とすることで、建築群より形成された多様な庭園の内部空間を周囲の環境と分離し、内部で豊富な景観をもつ独立的な庭園空間を作り出すことである。中国の伝統的な造園芸術には、風水文化に属する桃源郷のイメージ<sup>26)</sup>があり、これは自然的な山水を障壁とし俗世間を離れた美しい別世界を作り出すという概念である。グループAの庭園空間には、全体的な配置が桃源郷のイメージとよく一致されており、桃源郷に代表される伝統的な隠棲思想<sup>26)</sup>の影響を受けたことを表わしている。

グループB(10か所)の庭園では、すべて周辺に対して閉じている建築配置がみられ、そのうち2か所で開いている配置をあわせもっているが、全体的に閉鎖的な空間構成である。主な視線はほとんど南向きで単一である。周りに築山がない庭園は3か所で、他の7か所は片側(3か所)もしくは両側(4か所)である。比較的に少ない築山の配置では、庭園空間と周囲環境の連絡に対する制限も少ないと考える。庭園空間以外においては、半数の庭園(5か所)は四方に水面で囲まれており、明確な境界線が形成されている。他の庭園(5か所)は片側(2か所)あるいは両側(3か所)しか水面に面していない。グループBの庭園は主に生活娯楽空間と宗教祭祀空間として築造され(表-1)、建築群は主に周囲に対して閉じている合院型の配置である<sup>29)</sup>。本研究でわかるのは、グループBの庭園において、築山と水面ではなく、合院のような周辺に対して閉じている建築配置で、閉鎖的な庭園空間を形成することである。中国の代表的な造園理論書の『園冶』には、城市地は庭園の敷地選定の一つであると記載された<sup>27)</sup>。城市地で築造される庭園においては、一般的に塀と周辺に対して閉じ

ている建築を用いて、周囲と離れた閉鎖的な庭園空間を作り出し、中国の蘇州古典庭園と清朝に流行した四合院はこの代表例である<sup>28)</sup>。グループBの庭園空間の造営手法はその代表例と似ている。

グループC(8か所)の庭園は、周辺に対して開いている建築配置であり、周囲の環境と接し、開放的な空間特徴をもっている。主な視線はほぼ四方に向かい配置されている。4か所の庭園の西側には山が築かれ、東側が3か所、南側が2か所、北側が1か所ある。築山が三側である1か所以外、5か所の庭園は片側(2か所)や両側(3か所)のみで山を築き、2か所は築山が分布していない。ほとんどの庭園は周囲を水面に囲まれ、明確な境界線が形づくられている。また、3か所には特有な水面があるものも見られる。グループCの庭園は主に遊覧鑑賞空間と生活娯楽空間として築造され(表-1)、建築は主に周囲に対して開いている自由型、線型、散点型の配置である<sup>29)</sup>。本研究でわかるのは、グループCの庭園において、開いている建築配置と全方位の視線向きであり、さらに築山が少ないことで、全方位にわたる視野を備える開放的な庭園空間が創出され、多くの景観を庭園空間に取り込むことができることである。中国の伝統的な造園では、グループCのような配置は一般的に視野が広く、景色が美しい所で見晴らすために築かれた亭閣などに用いられ<sup>29)</sup>、遊覧鑑賞空間で多く見られる。円明園においては、このような庭園空間の作り方が生活空間にも多く使用され、庭園空間造営上の目新しい手法と言える。

グループD(11か所)の庭園はすべて周辺に対して開いている建築配置がみられ、そのうち5か所で閉じている建築配置をあわせもち、開放的な特徴と閉鎖的な特徴をもっている庭園空間が構成されている。多くの庭園(7か所)は主な視線が2つの方向(5か所)あるいは3つの方向(2か所)に向かい配置され、南向きと西向きを主としている。築山が三側であるの1か所以外、8か所の庭園には山が片側や両側しか築きておらず、2か所は築山が分布されていない。その中に、築山が多く庭園の東側(7か所)に配置され、北側(4か所)と南側(1か所)と西側(1か所)も見られる。ほとんどの庭園は四面に水面を接しており、明確な境界線が形成されている。グループDの庭園は主に遊覧鑑賞空間と生活娯楽空間として築造され(表-1)、建築は主に周囲に対して開いている自由型、線型、散点型の配置である<sup>29)</sup>。本研究でわかるのは、グループDの庭園において、開放的な特徴と閉鎖的な特徴をもっている庭園空間は主に南と西の方向で周辺環境と繋がっているが、東と北の方向である築山ため周辺環境と区分されている。このような庭園空間には、建築配置がすべて「坐北朝南」という伝統的な配置に従うとは限らないが、全体的にみると、「背山面水(山を背にして水面に望む)」という伝統的な配置と合致する。

既往研究<sup>7,8,9,10,30)</sup>より、円明園の全体配置が古代の風水学上の「九宮八卦」という思想に基づき、大いに風水理論の影響を受けたと考えられる。風水学においては、「坐北朝南」、「背山面水」と「四象<sup>31)</sup>」は住宅の敷地選定の基本的な規則であり、「三方を山に囲まれ、一方に水面を面している」という配置が最も理想的な立地と見なされている<sup>32,33)</sup>。既往研究<sup>29)</sup>の結果をふまえ、円明園の40か所庭園の配置を概観すると、庭園の中にある建築の配置だけでなく、周囲にある築山と水面の配置も全面的に伝統的な風水理論に依拠するとは限らず、革新的造園手法を用いていることがわかる。最も明らかなのは、グループCのように生活娯楽のための庭園で開放的な建築配置と多方向の視線向きを配置することである。一方、各種類の庭園の具体的な特徴を見ると、伝統的な造園文化に従う点も見られ、グループAの庭園の桃源郷のイメージ、グループBの閉鎖的な建築配置とグループDの庭園の「背山面水」という配置はこの例である。円明園の全体においては、築山、水面と建築群を活用し、多様な庭園空間が造営され、風景が麗しく、住みやすい離宮が形成されている。

## 5. おわりに

本研究では、築山・水面と建築群を共に分析対象とし、それらの位置関係より、庭園空間の総合的な特徴を明らかにし、庭園空間造営の手法を検討した。築山・水面の特徴を把握した上で、建築群と周囲の関係性・庭園内の主な視線の向き・築山の方位・水面の方位の4つの観点から40か所の庭園を4種類に分け、庭園空間の特徴を明らかにした。グループAの庭園は、築山と水面を2層の境界線とすることで、内部で豊富な景観をもち、周囲に対して閉じている独立的な庭園空間の特徴をもっている。グループBの庭園は、築山と水面ではなく、周辺に対して閉じている建築配置により、閉鎖的な庭園空間を形成している。グループCの庭園は、開いている建築配置と全方位の視線の向きがあり、さらに築山が少ないことで、全方位にわたる視野を備える開放的な庭園空間を創出している。グループDの庭園は、開放的な特徴と閉鎖的な特徴をもっている庭園空間が主に南の方向と西の方向で周辺環境と繋がり、東の方向と北の方向にある築山により周辺環境と区分されている。円明園の「園中園」の山水配置においては、建築配置の造営手法と同様で、伝統的な造園文化に依拠する点(グループAの庭園の桃源郷のイメージ、グループBの周囲に対して閉じている建築配置とグループDの庭園の「背山面水」の配置)がみられ、革新的造園手法(グループCの生活娯楽のための庭園で、多方向の視線の向きと周囲に対して開いている建築配置)も用いられていることがわかる。円明園の全体においては、築山、水面と建築群を活用し、多様な庭園空間が造営されていることがわかる。

## 補注及び引用文献

- 1) 周継維 (1990): 中国古典園林史: 清華大学出版社, 4pp
- 2) 前掲1), 7pp
- 3) 円明園管理处 (2010): 円明園百景図志: 中国大百科全書出版社, 12pp
- 4) 吳祥龍 (2007): 円明園盛期物質実体空間構成要素分析——山水要素: 中国園林04期, 40-46
- 5) 檀 馨ら (2007): 円明園九州景区山形、水系、植物景観的研究及修復: 中国公園04期, 2-8
- 6) 楊來運 (2008): 浅探円明園理水: 円明園06期, 54-57
- 7) 曹 新 (2016): 円明園的山水空間格局和類型研究: 中国園林06期, 111-116
- 8) 何重義 (2009): 対円明園造園芸術的再認識: 古建園林技術03期, 18-22
- 9) 于希賢ら (2008): 円明園水景芸術: 円明園07期, 48-57
- 10) 孟 彤 (2011): 从円明園的九宮格看皇家園林造園理念: 華中建築11期, 94-96
- 11) 周継維 (1981): 円明園的興建及其造園藝術談: 円明園01期, 28-40
- 12) 楊德娟 (2013): 皇家園林園中園理法研究: 北京林業大學
- 13) 吳曉舟 (2006): 試論北京古典園林地勢處理手法及空間效應: 北京林業大學
- 14) 吳揚 (2010): 円明園地形空間的視覺分析: 北京林業大學
- 15) 郭敏頤ら (2010): 円明園的園中園遺產: 浙江古籍出版社, 18pp
- 16) 「清」唐岱「清」沈源 (2008): 円明園四十景図: 中国建築工業出版社
- 17) 何重義 (2010): 円明園園林藝術: 中国大百科全書出版社, 97pp
- 18) 本研究において、円明園の平面図は主に3つの参考資料により作成する。1つは「円明園四十景図」であり、その図面に建築配置と築山の位置がはっきり描写されているが、図面を美化するため、築山の高さが芸術的に誇張され、實際の高さを確認できない。もう1つの資料は1831年頃に皇室の工匠が使用している「円明園総平面図」である(引用文献15)。その図面には、当時の建築と築山の位置、水面の分布などを表示しているが、一部の庭園の改修があるため、「円明園四十景図」の時代の庭園配置とは違っている。よって、本研究においては以上2つの資料も参考とし、平面図を作成する。また、「円明園三遊亭実測図」は1933年に北平市政府より製作された遊亭の地形の測量図であるが、長い間に築山の自然的な風化と人為的破壊行為があるため、この測量図より、「円明園四十景図」の時代(1744年)にあたる築山の高さを確定できない。そのため、本研究で作成する平面図においては、築山の等高線は、既存資料に基づき予想的なものであり、築山の実際の高さではない。章俊華 (2007): 中国・頤和園における植物の花ごぼからみた庭園空間の表現と特徴: 東南情報科学論文集21, 201-206
- 19) 佐藤 昌 (1991): 中国園林史(下巻): 日本公園緑地協会, 15pp
- 20) 楊振鐸 (2007): 円明園的山水: 感悟円明園山水遺存: 円明園07期, 58-82
- 21) 楊乃蔚 (1986): 円明園大事記: 円明園04期, 29-37
- 22) 張亞平ら (2016): 中国清朝繪畫『円明園四十景図』における庭園建築配置からみた庭園空間の特徴ランドスケープ研究: 日本造園学会誌79(5), 409-412
- 23) 円明園には、多くの亭・樹・台などの小型の建築が山頂、山腹あるいは岸辺に配置されているが、人の主要な活動場所ではないため、本研究の範囲に含まない。
- 24) 「円明園四十景図」と関連資料により、庭園の内には、築山と水面以外、明らかな地形の変化がないと考えられる。また、13か所の庭園には、2階建ての主要な建築があることも見られるが、1か所のみが2階建ての前に築山が配置されている。そのために、築山の2階建てに対する影響が極めて小さい。平面図では、両方の関係は平面における配置と関連があり、建築の階数とは関連がないため、本研究では建築の階数は分析要素としない。
- 25) 于希賢ら (2006): 中国古代風水的理論与实践(上): 光明日報出版社, 256pp
- 26) 『園治』には、造園における第一のステップは「相地(サイト選定)」であり、サイトは山林地、城市地、村莊地、郊野地、傍宅地と江湖地の6種類に分けられている。
- 27) 汪菊淵 (2006): 中国古典園林史: 中国建築工業出版社, 560pp 681pp
- 28) 劉殿平 (2000): 中国建築類型与結構: 中国建築工業出版社, 36pp
- 29) 于 涌 (2012): 移天縮地到君樓: 海天出版社, 12pp
- 30) 風水学では、「四象」は「東蒼竜・西白虎・南朱雀・北玄武」という概念であり、それぞれ住宅の四方にある川・道路・池と山に相当する。
- 31) 前掲26), 25pp
- 32) 于亮 (2011): 中国伝統園林相地与借景理法研究: 北京林業大學, 28pp